

守る／破る／離れる

野田俊作

要旨

キーワード：

ちょうど十年前の1982年には、私はシカゴ・アルフレッド・アドラー研究所にいた。そこでは、研究所の講義とは別に、バーナード・シャルマン先生の個人指導を受けていた。研究所での講義は系統的でもありよく工夫されてもいたが、正直言って、渡米前に本で学んだこと以上のものはほとんどなかった。これに対して、シャルマン先生から学んだことは、すべて目新しいことばかりであった。しかも、言葉で学んだことよりも、先生の治療やスーパービジョンの方法を見ることによって、生きた知恵を学ばせていただいたことが大きかった。

ただ、ひとつ困ったことがあった。それは、先生が指導料を請求なさらないことであった。困ったが、なんとなく、こちらからも言い出しづらくて、そのまま日が過ぎていった。そこで、親しくなった絵画療法士のメアリー・フレミングさんという人に、「シャルマン先生が指導料を受け取らないのだが、どうすればいいだろうか」と相談してみた。彼女は、「私に聞くよりも、本人に聞くのがいいと思う」と、アドレリアンらしい答えくれた。それで、シャルマン先生に直接聞いてみる勇気が出た。

先生は、「私には何もお礼をしなくていい。私が教えたことを、日本人に伝えてくれれば、それで十分だ」とおっしゃった。そのときは気がつかなかったが、今にして思えば、これは高くついた。先生から受けた学恩を金銭で先生にお返しするなら、それで一応は精算が済む。ところが、日本人に行為で返すとなると、一生かかるではないか。こうして私は、アドラー心理学を日本に伝えることで、シャルマン先生への負債を返済しなければならなくなってしまった。

こうなると、不便なものは、私はいつでも『正統』でいなければならないということである。私が伝えるものは、私の理論ではなくて、シャルマン先生から習ったアドラー心理学でなければならない。また、生徒さんたちは、私が教えるものをそのままアドラー心理学であると理解するから、みだりに私の独創を交えるわけにゆかない。すくなくとも、何が私の独創で、何が本来のアドラー心理学かを、はっきりと区別して伝えなければならない。これは猛烈に窮屈なことである。しかし、この十年、私は極力そうしてきた。いくらかは私が新たにつけ加えた概念もないではないが、それらは、私がつけ加えたものであることを、自分でも意識し人にもそうやってきた。これは、私の独創性を誇るためではなくて、むしろ正統理論からの逸脱を認めるためである。

武道の世界に、『守・破・離』という理念がある。ある道を習うには、最初は一切独創を交えないで、ただ師範の言う通りの型を「守る」。そして、型が完全に身についたら、それを少しずつ「破り」はじめ、他流の型なども学びつつ、自由に自分の型を作ってゆく。そして、ついには、道を極めて、すべての型から「離れる」のである。

私は、シャルマン先生への負債のために、今もアドラー心理学の型に縛られていて、その学燈を「守る」ことがいちばん大きな仕事になってしまった。少しはそれを「破る」こともあるが、それを「離れる」ことは、おそらく一生できない。これは少し不愉快なことであるが、いたしかたない。しかし、私からアドラー心理学の型を習った人たちには、この不自由を押しつける気はない。いつでも自由に「離れて」いいのである。ただし、せっかく良いものを学ばれるのであるから、基本的な理論と技法とをしっかりと体得してから離れてくださるのがいいと思う。この十年で、数は多くはないが、基本をしっかりとマスターされた人たちが育ってきている。その方々は、これから少しずつ「破る」段階に入られるのであろう。日本のアドラー心理学の第二の十年が始まるのである。

更新履歴

2012年6月1日 アドレリアン掲載号より転載